関西大学
アジア・オープン・
リサーチセンター
KANSAI UNIVERSITY OPEN RESEARCH CENTER for ASIAN STUDIES

DRAW YOUR ASIA

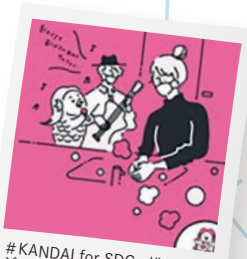
KU-ORCAS NEWS LETTER No4

CONTENTS

センター長挨拶 …… P2
活動報告 …… P3
コロナアーカイブ@関西大学 …… P5
中尾山古墳特集 …… P13
山東大学漢籍
目録作成プロジェクト …… P14
大坂画壇の絵画
～日本・イギリス共同研究展～ …… P15

#キャンプ場のコロナ対策

#コロナは子供の遊びの中にも


#KANDAI for SDGs 推進プロジェクトは、換気啓発・手洗い啓発のポスターを作成しました。

#いつもと違うオープンキャンパス その2

#研究者向けイベントの中止

#法科大学院のコロナ対策

#KANDAI for SDGs 推進プロジェクトは、換気啓発・手洗い啓発のポスターを作成しました。

#二測定(身長・体重測定)を実施しました(関西大学初等部)

#生協食堂の対応

KU - ORCASでは
新型コロナウィルス感染症
および、
スペイン・インフルエンザの
記録と記憶を
求めました。

関西大学コロナアーカイブ 2020 CONNECT TO THE FUTURE

センター長挨拶

関西大学アジア・オープン・
リサーチセンター長

内田慶市

コロナ禍を乗り越えて

KU-ORCASの事業も４年を終えようとしています。

ただ、先の３年間は順調にプロジェクト事業を進めてきましたが、今年度は未曾有のコロナ禍で我々の行動も制限され、当初予定していたような研究活動が思うように出来なくなったというのが現状です。それでも、研究の歩みは止めてはいませんし、成果は着実に上がっていると考えています。そして何よりも私達人間はマイナスをいつもそのまま受け入れるのではなくて、実はプラスに変えることが出来るという特性を備えているということです。

このコロナ禍によって見直されたり、ようやく促進されたこともあります。働き方、学び方、教え方等の変革がそれです。

これまで日本の社会では「テレワーク」などは海の向こうの話と思われてきました。しかし、今や多くの職場で「テレワーク」が推奨され、在宅勤務が広がっています。

教育においてもこの１年で急速にICTの活用が進められています。小中高でもオンライン授業が行われるようになりましたが、特に、大学においては昨年はほとんどがオンラインで、最近でも対面とオンラインの併用というのが一般的になっています。私なども、かつてはZOOMなどのWeb会議システムは名前こそ知っていましたけれども使ったこともありませんでしたが、今では授業だけでなく、様々な会議や研究会、シンポジウムもZOOMで行うことが当たり前になっています。講義風景を自分で撮影し、それをYouTubeなどにアップしてオンデマンド教材として利用することも広く行われるようになりました。

この流れはコロナが収まった後でも恐らくもう後戻りしないと思われます。

とりわけ私達のプロジェクトの関係でいえば、文献資料のデジタル・アーカイブス化はまさにこの流れに乗っかったもの、いや、むしろ、こうした流れを先導するものです。現地に赴いた調査がままならぬ現在、ネット上でのデータベースの活用やIIIFを利用した版本対照等々、新しい学問研究のあり方、方法が求められているのです。KU-ORCASの今後の役割は極めて重要になると考えています。

今年度は各ユニットからの報告に詳しく示されていますが、例えば、ユニット１の近代漢語文献データベースのリニューアル、ユニット２の泊園関係資料デジタル化の充実や大英博物館とのコラボによる大坂画壇の展示会、またユニット３では古代史研究に大きなインパクトを与える中尾山古墳の発掘調査も開始されました。この他、ユニット４の活動として、廣瀬本万葉集のデジタル化とTEI化も進められていますし、コロナの関係では、コロナ禍の記録と記憶の収集という名目で学内研究費を獲得して「コロナ・アーカイブ」も立ち上げております。

本プロジェクトも最後の１年となりましたが、着実な成果を基盤に、ORCASのその後も見据えながら引き続き活動を進めて参ります。研究員の益々の研鑽を期待すると共に、関係各位の一層のご支援をお願いする次第です。

2020

- **(2月28日)～4月30日** クラウドファンディング実施「バチカン図書館に収蔵された日本関連史料の謎に迫る！」
  内田・藤田・菊池・小川
- **4月29日** (Day of DH 2020：デジタルヒューマニティーズの日を記念して)
  東アジア DH ポータル公開
  菊池

- **7月1日～(2021年)3月31日** 「コロナアーカイブ@関西大学」を核とした新型コロナウイルス感染症およびスペイン風邪の記録と記憶の収集発信プロジェクト
  (新型コロナウイルス禍の克服に資する研究プロジェクト：関西大学学内研究費採択)
  内田・藤田・(岡田)・林・菊池

- **7月** 大坂と京のサロン展　(中止)
- **8月** 泊園書院ホームページリニューアル

- **9月12日** 【研究クラウドファンディング】書籍のデジタル化体験会実施　(於：以文館)
- **9月** クラウドファンディング達成プロジェクト「バチカン図書館に収蔵された日本関連史料の謎に迫る！」　現地での調査研究(中止)
- **9月** 近代漢語文献データベースを関西大学デジタルアーカイブで公開
- **10月26日** スペイン・インフルエンザに関する史料をその場でデジタルアーカイブ化するイベント (未実施)
  於：KU-ORCAS

  Archivathon
  KU-ORCAS ×
  吹田市立博物館
  オンラインイベント開催

- **11月8日** 東アジア文化交渉学会・第 12 回年次大会開催
  (中国鄭州大学及び TencentMeeting と Bilibili による同時配信会議)
- **11月1日～30日** 第 22 回図書館総合展 ONLINE ポスターセッション出展
  テーマ：「関大といえば東アジア研究、東アジア研究といえば関大」
  菊池
- **11月28日** 第 2 回スペイン・インフルエンザに関する史料をその場でデジタルアーカイブ化するイベント
  (未実施)

  第 2 回　Archivathon
  オンラインイベント開催
- **11月** 外国文化研究発信のための Wikipedia 翻訳＆執筆ワークショップ (中止)
- **11月～12月** 飛鳥の大墳墓・中尾山古墳発掘調査
  (ユニット3) 西本・米田・井上
- **12月** 東アジアの西洋料理伝播と受容ワークショップ　於：中国復旦大学
  (中止)
- **12月14日～(2021年)1月23日** 関西大学博物館 2020 年度冬季企画展
  大坂画壇の絵画
  日本・イギリス共同研究展
  関西大学博物館及び
  KU－ORCAS 主催
  (ユニット 2) 中谷

2021

- **1月22日** 2020 年度
  KU－ORCAS 研究集会：
  オンライン開催
  「デジタルヒューマニティーズは東アジア研究をどのように変えたのか？変えるのか？」
  (KU－ORCAS 全体行事)
  内田・奥村・吾妻・西本・菊池

- **1月29日** 廣瀬本万葉集の翻刻および TEI マークアッププロジェクトの成果を公表
  (ユニット 4)
- **2月1日** 関西大学デジタルアーカイブ塗り絵「長谷川貞信コレクション」及びウェブ会議用背景画像集を公開

- **2月18日** 関西大学デジタルアーカイブ掲載資料を利用した図書が大韓民国歴史博物館から刊行
  タイトル：
  자료로 보는 일제강점기 극장문화 (『資料に見る日帝強占期劇場文化』)
  蔵書提供：(パイロットユニット) 菅原

- **2月27日** 2020 年度
  KU－ORCAS
  国際シンポジウム：
  オンライン開催
  「デジタルヒューマニティーズ推進のための環境構築とその課題」
  (KU－ORCAS 全体行事)
  内田・藤田・沈・菊池

- **3月20日** クラウドファンディング報告会
  内田・藤田・奥村・菊池・小川

クラウドファンディング

クラウドファンディングで深まる日本・バチカン交流史

パイロットユニット
学外研究分担者
国際日本文化
研究センター
機関研究員
小川 仁

バチカン図書館は、ローマ教皇庁の図書館であり、世界最古の図書館のひとつです。関西大学アジア・オープン・リサーチセンター（KU-ORCAS）は、2017年9月にバチカン図書館、北京外国語大学、ローマ大学とのあいだで、バチカン図書館が所有する東アジア関連史料をデジタルアーカイブ化する協定を結んでいます。

バチカン図書館には、既に多数の日本関連史料が所蔵されていますが、資料登録されただけで、その内実が定かでないものもまた多いのが実情です。先述した協定に基づく調査においてKU-ORCASは、こうした史料群のなかから、新しい歴史的事実を含む史料を、いくつか発見するに至りました。とはいうものの、どんなに新史料の可能性が高くても、その解明のためには、色々と費用が必要となってきます。そうしたことから、バチカン研究プロジェクト「バチカン図書館に収蔵された日本関連史料の謎に迫る！」を立ち上げ、クラウドファンディングにチャレンジすることになりました。

その結果、127名のサポーターの方々から、¥2,379,400ものご支援を頂き、クラウドファンディングを成功裡に終えることが出来ました。

今回の研究プロジェクトで中心的に取り上げていく日本関連史料の一つに、新潟で活躍した書家、高橋松顧により昭和8年（1933年）にローマ教皇に献呈された古写経、ならびに高橋直筆の献呈状と献呈目録があります。高橋松顧についての研究は、新潟大学の岡村浩教授が長年にわたり調査を重ねてきましたが、ローマ教皇と高橋松顧の交流の事実は、今回発見した史料により初めて裏付けられました。高橋の献呈状によりますと、献呈された古写経は、奈良時代から鎌倉時代までのもの6点となっています。

さらに高橋松顧関連史料以外にも、バチカン図書館に眠る重要な日本関連史料は、他にもたくさんあります。長崎のオランダ商館長を務め、日本関連著作を残しているイサーク・ティチング（1745年～1812年）の直筆書込みが認められる『民家祝言婚礼仕用罌粟袋』、『日本海山潮陸図』などをはじめとする江戸期の地図3点

クラウドファンディング告知HP

など、挙げれば枚挙に暇がありません。

バチカン図書館に収蔵されている高橋松顧関連史料や、その他の日本関連史料の研究が進みますと、高橋より献呈された古写経の歴史的価値をはじめ、日本関連史料のバチカン図書館への収蔵経緯より解き明かされる日本とバチカンの文化交流史など、様々な歴史的事実の解明が期待されます。このような研究成果をより多くの皆さんに知って頂くために、2021年3月に研究クラウドファンディング報告会を開催します。そして2021年5月には、さらに対象を広げて高橋松顧とバチカンとの関係性、先述したティチングの書込みが認められる書籍の謎に迫る、より大きなシンポジウムの開催を予定しています。

バチカン図書館エントランス

コロナアーカイブ@関西大学

関大の皆さんのコロナ禍における記録と記憶を後世に

KU-ORCAS
特別任用准教授
ユニット4主幹
菊池 信彦

コロナアーカイブ@関西大学とは、コロナ禍における関西大学の関係者の記憶と記録を、ユーザ自身の手で収集保存するために開発した、デジタルアーカイブです。コロナアーカイブ@関西大学は、2020年７月から、本学による2020年度「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の克服に関する研究課題（教育研究緊急支援経費）」に採択されたことで、KU-ORCASを中心とした共同研究「『コロナアーカイブ@関西大学』を核とした新型コロナウイルス感染症およびスペイン風邪の記録と記憶の収集発信プロジェクト」（研究代表：内田慶市）として進めています。

コロナアーカイブ@関西大学のシステムや運用に関する特徴はいくつかあります。１つ目は、Omeka Sというデジタルアーカイブのためのオープンソースソフトウェアを利用し、画像データ自体はIIIFという国際的な画像共有のためのフレームワークに従って公開・提供しています。つまり、比較的安価に開発でき、そして、オープンなデータ利用環境を整えているということです。２つ目は、肖像権の処理のためにデジタルアーカイブ学会法制度部会が作成した「肖像権ガイドライン案（第３版）」の実証実験に参加し、円滑な処理を行う体制を整えたことです。また、著作権の処理のために利用規約を定め、クリエイティブコモンズライセンスの「表示 - 非営利 4.0 国際（CC BY-NC 4.0）」で提供することを求めるようにしました。４つ目は長期的な保存への備えです。KU-ORCASは2021年度で終了するため、収集データの長期保存が課題でしたが、これには学内の博物館や年史編纂室の協力を得ることで、KU-ORCAS以後の保存体制を整えることができました。

コロナアーカイブ@関西大学は、2020年４月17日から開始し、2021年３月現在、250点が登録されています。これは決して多い数字ではありません。ですが投稿されている資料は、大学の卒業式や入学式、遠隔授業等のコロナ対策、家庭や家族の様子などといった、関西大学というコミュニティを表現するものとなっています。また、Googleフォームを活用した「記憶の収集」も実践しています。こちらは、コロナ禍の１年を振り返りつつ、「私生活の変化」や「学校生活の変化」、そして「社会の状況」などについて率直に書いてもらうようにしているもので、開始数日で学部学生を中心に100点以上の「記憶」が集まりました。これらの内容の分析や保存・公開は今後の課題ですが、緊急事態宣言下での遠隔授業の様子やアルバイトの様子などは、学生視点の生々しいコロナ禍の記憶のアーカイブとなっています。

次年度にパンデミックが収束するかどうかは、第３波の渦中にいる2021年３月の現在ではなかなか見通せません。“アフターコロナ”と呼ばれるその時までこの「コロナアーカイブ@関西大学」を運用し、そして収集した記録と記憶を後世に伝えていきたいと思います。ご協力をよろしくお願いいたします。

KU-ORCAS 研究集会開催レポート

オープンプラットフォーム活用の実践例に関する研究集会

デジタルヒューマニティーズは東アジア研究をどのように変えたのか？変えるのか？

レポート報告
KU-ORCAS
副センター長
藤田 髙夫

概要

2021年1月22日開催

今回の研究集会は、二つの目的を持って企画されました。一つは、KU-ORCAS四年間の活動を振り返り、その成果を総括すること、もう一つは、資料のデジタル化によって価値付与をはかるDigitizationから、それを活用して新たな価値創造をめざすDigitalizationへのステップアップを意識し、研究の方向性を見定めることです。その内容について以下の五つの発表が行われました。

基調講演

永井 正勝 東京大学 U-PARL 副部門長・特任准教授

「東京大学アジア研究図書館デジタルコレクションの構築と今後の展開」

永井先生からは、2020年10月に開館した東京大学アジア研究図書館と、それを支える研究部門であるU-PARLの活動が報告されました。後半では、全学的なデジタルコレクションの構築体制と、人文知を付与したデジタルアーカイブの意義が紹介され、今後のデジタルヒューマニティーズの展開に貴重な示唆が提示されました。

難波・飛鳥研究の新展開

西本 昌弘

関大博物館所蔵の金石文拓本資料、関大図書館所蔵の内藤文庫本・長澤文庫本、「大阪関係史料」中の絵図・地図などの調査と撮影を進め、明日香村の中尾山古墳の発掘調査を実施しました。それらの中から難波・飛鳥研究に関わるデータと論点を紹介しました。

東西言語文化接触研究とデジタルアーカイブ

奥村 佳代子

「周縁」をキーワードに選りすぐった中国語研究に関連する近現代の文献を「東アジアデジタルアーカイブ」に書誌情報付きで公開し、資料調査と閲覧が容易になりました。また、運用再開の「近代漢語文献データベース」の活用による近代語研究の進展が期待されます。

廣瀬本萬葉集のTEIマークアッププロジェクトとコロナアーカイブ@関西大学

菊池 信彦

本報告では、天下の弧本である廣瀬本万葉集を対象に、人文学データの国際標準とするべく進めたTEIマークアップ化プロジェクトと、コロナ禍の記録と記憶を後世に残すために開発したコロナアーカイブ@関西大学について、デジタルヒューマニティーズの観点からそれらの意義について論じました。

泊園書院と大坂画壇

吾妻 重二

かつて大阪最大の私塾であった「泊園書院」の文庫・印章デジタルアーカイブの整備や、泊園門人データベースの構築と展望につき述べました。「大坂画壇」についてはそのデジタルアーカイブと「塗り絵　大坂画壇」、イギリスとの共同展示会について紹介しました。

KU-ORCAS 国際シンポジウムレポート

デジタルヒューマニティーズ推進のための環境構築とその課題

レポート報告
KU-ORCAS
副センター長
藤田 髙夫

概要

2021年2月27日開催

今回の国際シンポジウムでは、デジタルヒューマニティーズの推進において先導的な活動を展開している国内外の機関を招待し、各機関で収蔵されている資料の特徴や開発の経緯、プラットフォームの機能やそれを実現するための技術、利活用の取り組み、今後の課題などが披露されました。デジタルヒューマニティーズの推進のためには各機関の取り組みの内容や目的を際立たせつつも、連携を深めていく必要があることを再認識しました。

史的文学DBとその利活用について

馬場 基 奈良文化財研究所 都城発掘調査部史料研究室 室長

馬場先生からは、日本木簡研究のハブ的存在である奈良文化財研究所が、モノを扱う機関としてどのような経緯で史的文字の開発に至ったかが紹介されました。同時に、こうした大型 DB の構築に必須となる他機関との連携関係のあり方について、その基本的ポリシーも含めて共有すべき方向性が示されました。

簡牘字典と史的文学DBおよび中央研究院におけるデジタルヒューマニティーズの研究環境の取り組み

劉 欣寧 台湾 中央研究院歴史語言研究所 助研究員

上述の奈良文化財研究所の連携機関の主担者である劉欣寧先生からは、歴史語言研究所の所蔵する漢代木簡の画像データベース（簡牘字典）の構造と機能が紹介されました。世界に先駆けて中国古典籍のテキストデータベースを構築・公開してきた同研究所の経験と実績を踏まえ、今後の規範となるデジタル字典の姿が示されました。

漢学デジタル人文共通プラットフォームの需要と設計
The Functional Requirement and Designing of a Universal Digital Humanities Platform for Sinology

劉 煒 上海図書館副館長

劉煒先生からは、中国で最も先進的である上海図書館のデジタルヒューマニティーズの取り組みについて、その背景にある理論的根拠と実際の状況、ネットワークや IIIF の採用等詳しい報告が行われました。デジタルヒューマニティーズへの貢献についても話が及び、極めて示唆的で有意義なものでした。

歴史ビックデータ研究基盤のためのデジタルツールと相互運用

北本 朝展 ROIS-DS人文学オープンデータ共同利用センター センター長／国立情報学研究所 教授

北本先生からは、デジタルヒューマニティーズの両輪のひとつである情報学の立場から、さまざまな手法を活用した研究事例が紹介されました。「こうした情報学との協業は、人文学のスピードとスタイルを変える」という指摘は、人文学研究者にデジタルヒューマニティーズの価値を改めて認識させるものでした。

「データ駆動による課題解決型人文学の創成」事業に向けて

山本 和明 国文学研究資料館古典籍共同研究事業センター長

山本先生からは、これまで多くの大型プロジェクトを主導してきた国文学研究資料館が今般スタートさせた上記事業についての紹介がなされました。とりわけ、我が国の人文学者の大型資金獲得に対する姿勢についての指摘は、本シンポジウム最後の総合討論に、刺激的な論題を提供するものとなりました。

オブジェクトを活用した学びをデザインする:慶応義塾ミュージアム・コモンズにおけるデジタル環境構築の試み

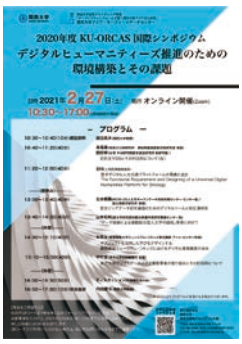
本間 友 慶応義塾大学ミュージアム・コモンズ専任講師　アート・センター所員

本間先生からは、本年４月にオープンする慶應義塾大学ミュージアム・コモンズ（KeMCo）の活動が紹介されました。デジタル環境を利用して同大学が保有する多様な文化コレクションおよび、それを所管する組織を結びつける様々な興味深い企画とともに、それを教育につなげていく着想は、デジタルヒューマニティーズの新たな可能性を示すもので、非常に魅力的で示唆的な構想であることが了解されました。

東京大学デジタルアーカイブズ構築事業の取り組みとその利活用について

中村 覚 東京大学史料編纂所　助教

中村先生からは、史料編纂所だけでなく東京大学全体のデジタルアーカイブズ構築をめざす同事業が紹介されました。特定部署による学術資料のデジタル化が個別分散的に進められている現状において、大学全体としてのアーカイブ化構想を打ちだした先導的取組は、本学 ORCAS も含めた多くの関係者にとって、有力な羅針盤となるものでした。



ユニット1主幹
外国語学部教授
奥村 佳代子

東西文化接触とテキスト

近代漢語文献データベース公開と漢籍目録作成開始

大きな活動としては、近代漢語文献データベース公開（再開）、関西大学東アジアデジタルアーカイブの充実と、山東大学目録作成開始を第一に挙げたいと思います。

近代漢語文献データベースは、しばらく中断しておりましたが、文献検索と語彙検索が再度可能となりました。本データベースは、近代以前の中国の文献を中心に作成されたものです。こちらをご覧ください。

https://www.iiif.ku-orcas.kansai-u.ac.jp/ctext/about

関西大学東アジアデジタルアーカイブは、公開資料の大幅な増量を目指しました。特に江戸時代の中国語関連資料の公開です。本学総合図書館の長澤文庫及び中村文庫には、長崎の中国語貿易を支えた通訳である唐通事や彼らが使用した中国語である唐話に関する文献、江戸から明治にかけての日本人による中国語白話資料が多く所蔵されており、なかには他所での所蔵が報告されていないものも含まれます。

また、新たに山東大学からの要請を受け、10月から本学総合図書館所蔵の漢籍目録の作成を開始しました。これは、山東大学が世界規模で展開している漢籍目録作成プロジェクトである「全球漢籍合璧工程調査目録編纂複製作業」の一環で、菊池信彦KU-ORCAS特別任用准教授と二ノ宮聡PDの指揮のもと目録作業チームが日々取り組んでいます。すでに、玄武洞文庫蔵「孝経」の各版本のデータを作成し、内藤文庫蔵の漢籍を整理しているところです。

昨年度末開催予定の「東アジアの西洋料理　伝播と受容　ワークショップ　近代以来の洋食、洋飯書と大餐館」はついに開催できないまま現在に至っていますが、内容を一部変更し、次年度の開催を目指したいと考えています。

山東大学漢籍目録作業の様子

ユニット2主幹
文学部教授
吾妻 重二

東アジアの中の大阪の学統とネットワーク

本ユニットは前年度に引き続き漢学塾「泊園書院」および「近世大坂画壇」の研究を内外の協力を得て推進しました。これらはともに大阪の学統を代表する存在であり、本学がその研究の中心となっています。

泊園書院プロジェクトにおいては、2020年５月にデジタルアーカイブ上の印章の情報をすべて更新し、７月にはWEB泊園コンテンツを充実、全面的にリニューアルして公開しました。

大坂画壇の絵画

特筆すべきは「南岳百年祭」記念事業の開催です。2020年は泊園書院の黄金期を作った藤澤南岳の没後100年目にあたっており、東西学術研究所や泊園記念会と協力して発起人会の開催（10月22日）、講演会などの記念シンポジウム（同23日、梅田キャンパス）、研究発表（同24日、千里山キャンパス）、さらに10月から11月にかけて企画展「藤澤南岳の書と芸術」（図書館展示室）を開いたのです。コロナ禍の中ではありましたが、シンポジウムは事前予約によって「満席御礼」となり、オンライン視聴の申し込みも多数にのぼりました。

南岳百年祭

「南岳百年祭」発起人会

大坂画壇プロジェクトでは、本学図書館や東西学術研究所が所蔵する大坂画壇の絵画（木村蒹葭堂周辺の文人画・写生派から近代の個性派）を2020年４月以降アーカイブ化して公開し、世界中の研究者や愛好家が利用できる体制をとりました。また2018年以来、ロンドン大学SOAS、京都国立近代美術館、大英博物館日本部門と協力して本学や大英博物館で研究集会を開き、その実績を踏まえて、2020年から21年にかけて大阪で、2022年に京都で、それ以後にロンドンで展覧会を開催し、本学の大坂画壇コレクションの一端を披露することになっています。まずその第１弾として2020年12月から翌年１月まで、本学博物館で他館では展示されない作品を集めた「大坂画壇の絵画－日本・イギリス共同研究展－」を開催したところです。

ユニット3主幹
文学部教授
西本 昌弘

古都・史跡の時空間

関大所蔵拓本・古典籍・古地図などの調査・撮影

今年度は、まず、関大博物館所蔵の本山コレクション木崎愛吉旧蔵金石文拓本資料の中から、古都や史跡に関する拓本の調査と撮影を行いました。

内藤文庫本『新撰姓氏録』冊首

次に、関大図書館所蔵の内藤文庫本・長澤文庫本・岩崎文庫本などの古典籍の中から、古都や史跡に関わる写本を中心に調査と撮影を行いました。このうち内藤文庫本の古典籍約40点は11月に東アジアデジタルアーカイブで公開されました。とくに、内藤文庫本の『新撰姓氏録』の冊首には、舟橋（清原）相賢（1618-89）の所蔵印が捺されていますので、江戸時代前期に遡る清家文庫本の貴重な写本であることが判明しました。内藤文庫本にはこれ以外にも『改元部類記』『令集解』など江戸時代の良質な写本が含まれています。これらがデジタルアーカイブで公開されることによって、全国の研究者に多大の便宜が与えられることが期待されます。

また、関大図書館所蔵の「大阪関係史料」の中から、大阪の絵図・地図類を選定し、それらの調査と撮影を開始しました。大阪でも有数のコレクションのデジタル公開をめざしています、

同左（拡大）

明治21年「大阪実測図」

さらに、奈良県明日香村と関大考古学研究室が共同で文武天皇陵に比定されている中尾山古墳の発掘調査を行いました。関大ではユニット３の米田文孝氏が学生を率いて発掘を主導しました。調査成果については、中尾山古墳特集のところで詳しく紹介します。

この他、KU-ORCAS と東西学術研究所の共催で、以下のような研究例会も開催いたしました。

2020年12月11日（金） 児島惟謙館１階第１会議室（Zoom オンライン併用）

山口哲史（関西大学大学院）「平安時代四天王寺における天台宗の受容―法隆寺との比較を通じて―」

曾昭駿（関西大学大学院）「「北条貞時十三年忌供養記」からみる鎌倉禅林」

鈴木景二（富山大学教授）「古代寺院の門の神将について」

ユニット4主幹
特別任用准教授
菊池 信彦

古典籍資料の情報資源化

廣瀬本万葉集の翻刻とTEIマークアップデータ作成

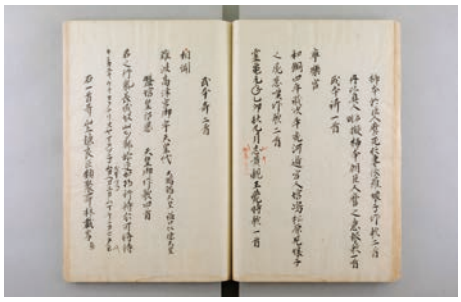
ユニット４では、本学が所蔵する廣瀬本万葉集を対象に、翻刻と TEI/XML マークアップを行っています。

万葉集には、その伝来史上様々な写本が存在していますが、現存する完本のほとんどが鎌倉時代の僧仙覚が諸本を校合して作成した「仙覚校訂本系統」に属しています。しかし、廣瀬本万葉集はそれとは異なる「非仙覚本系統」の唯一の完本として、万葉集研究上特異な地位を占める資料です。また、その奥書から、この廣瀬本万葉集は新出の定家本万葉集として大きな話題となるなど、その資料的価値が極めて高いことが知られています。

KU-ORCAS が運用している関西大学デジタルアーカイブでは、この廣瀬本萬葉集の画像データをすでにパブリックドメインで公開しています。私たちの研究ユニットではさらに、本学での今後のデジタルヒューマニティーズ研究の進展を見据えつつ、その研究素材と基盤形成を目指して、この廣瀬本万葉集のテキストデータ（翻刻）の作成と TEI（Text Encoding Initiative）マークアップ化を進めています。

ここでいう TEI とは、国際的な人文学資料のマークアップルールであり、欧米の研究者を中心に人文学研究資料の電子編集のために生み出されたもので、現在は XML 技術をベースに開発が続けられているものです。TEI は人文学研究資料のテキストデータを作成する際に採用される国際的なデファクトスタンダードとして位置付けられているため、これを採用することで、世界標準のデータ作成を実現することができます。

データの作成は廣瀬本万葉集の巻２から取り掛かっており、昨年度と今年度でその半ばまで終えました。次年度は外部資金の獲得を前提としつつ、さらに翻刻と TEI 化を進めていく想定です。



廣瀬本万葉集巻２

岩崎美隆文庫デジタル化と近世国学者たちの知のネットワーク解明のためテキスト化の規格作成

ユニット1
ユニット4
研究分担者
文学部教授
乾 善彦

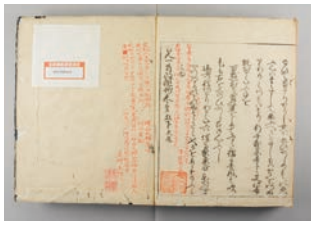
廣瀬本万葉集のTEI化による古典籍情報資源化

本学図書館には岩崎美隆文庫をはじめ、国学者たちの旧蔵書が多く所蔵されています。それらには決まって、彼らの学習の跡が「書入れ」の形で残されています。それらは、師説の継承と共に自分自身の発見の証でもあります。彼らはまず、師説を丁寧に書き込んで、その上に自説を展開するという方法をとっていました。本居宣長記念館には、万葉集と百人一首改観抄の宣長自筆書入本が残されています。本学岩崎文庫の百人一首改観抄は、宣長自筆本とそっくりであり、貴重書庫の寛永版本万葉集も宣長自筆書入本そっくりなのです。そこで、同類の書入本をデジタル化してテキストデータを作成することで、近世国学者たちの知のネットワークを明らかにすることができると考えました。テキストデータ化の規格を作ることで、各地の図書館に蔵されている国学者たちの書き入れを集大成するための足掛かりを作ることができると考えています。

岩崎美隆文庫蔵百人一首改観抄
（朱：宣長注、墨：美隆注）

同時に、本学所蔵廣瀬本万葉集の書記情報を TEI データ化する作業を行っています。これも、書入れ本研究のためのデータ化のひな形作りです。これによって、古典の書き入れを情報資源としてさまざまな活用が可能になると考えています。

関西大学図書館蔵寛永版本奥書
（貼紙まで宣長自筆本と同じ）



同奥書
（右頁：宣長奥書、左頁：美隆奥書）

敦煌文書を起点とする漢語史研究

ユニット1
研究分担者
外国語学部教授
玄 幸子

敦煌文獻に関する文献学・学術交流を視野に入れて

中国口語の通時研究を第一の研究テーマとしていますが、口語の分析・研究の歴史自体がまだ新しく、その黎明期からせいぜい100年余りしか経っていません。中国語の悠久の歴史から見ればまだまだ始まったばかりともいえます。そもそも文言至上の観念を持つ漢語において口語の歴史をたどる発想自体が新しいともいえましょう。その中で口語史研究を可能にしその契機ともなったのが敦煌文書の発見でした。膨大な口語史料が書写された当時のままの姿で同時資料として出現したことにより中国口語研究が飛躍的に発展したともいえましょう。

既出版関連書籍

然しながら一方で写本を読み解くことの難しさがあり、真偽問題を含む史料の同定・整理が欠くべからざる前提となります。よって、語学的研究と並行してトンコイズムという用語の創始者でもある内藤湖南蒐集の資料の整理、草創期敦煌学の状況の把握なども視野に入れた研究を進めています。

内藤文庫所蔵　S.525　写真資料

2020年度は特に内藤湖南文庫に収蔵される敦煌写本の写真やロトグラフの把握・整理に努め、年度内の web 公開を準備中です。さらに本学東西学術研究所の創設者でもあり、湖南の英仏渡航に随行し敦煌写本の調査を進めた石濵純太郎博士にかかる大阪大学図書館石濵文庫の未公開書簡資料を調査し、當時の学術界の交流の実情を見ることが出来ました。

東アジア近代新語・訳語研究プラットフォームの構築

ユニット1
研究分担者
外国語学部
沈 国威 教授

日中韓研究者の共同作業の場

東アジアは、漢字を媒体に西洋の近代的概念を受け入れ、共有しています。近代以降の文化交渉と言語接触の最も典型的な事例として研究者の関心を引きつけてきました。これまでに日中韓越の研究者がそれぞれの立場から研究を進めてきましたが、研究成果、リソースを集約し、より効率的に研究を行うべく、われわれは、北京外国語大学歴史学院の協力を得て、2019年に「世界史的視点からの概念史研究：東アジア近代新語訳語研究プラットフォーム」を構築しました。（図1）プラットフォームには中日近代同形語が7714語収録されています。それぞれの収録語に対して、日中韓越の四つの言語の語形、英語の対訳語、及び20世紀初頭までの中日文献、英華英和辞典などの出典を示しています。さらに【語誌】では、見出し語の漢字文化圏における移動、定型化の過程を記述しています。（図2）われわれの目的は、東アジア諸言語の近代語彙史、及び近代概念史等の研究に基礎的資料を提供することです。

図1

図2

コロナ禍の中、日中の研究者が力を合わせ、着実に研究を進めています。2021年度末では、まず中国語に進出した日本語由来の近代新語・訳語の部分（2000語前後）を完成する予定です。この部分は、また『中国語における日本借用語辞典』（仮題）として中国の出版社より刊行します。

明治・大正・昭和期に刊行された中国語教材

ユニット1
学外研究分担者
目白大学
外国語学部専任講師
氷野 善寛

当時の中国語会話書や中国語教材の目録の作成とデータベースの構築

明治以降に出版された中国語関連の原資料の収集を積極的に行い、目録整理を行っています。同分野の目録では六角恒広2001『中国語関係書書目』が有名ですが、ここ数年の調査により、同目録には収録されていない数多くの資料があることが分かってきました。その多くは、1940年前後のもので、レコード、子供向けの教材や玩具（カルタや紙芝居など）、パンフレットなどに掲載されている中国語会話、各種雑誌に掲載されている中国語講座、個人の筆記類など、公的な図書館には収集されていないものになります。こういった資料を探しては購入したり、公的な機関に収集されている書誌情報を少しずつ整理したりすることで、これまでに『清代民国漢語文献目録』（2011）、『鱒澤文庫目録（初稿）』（2017）などの目録を公開しました。また会話書に収録されている中国語文の全文検索と収録語彙の検証を目的に構築した「中国語基本語彙検証データベース」に作成したデータを使用し、教材のデジタル化も進めています。これらの資料は単に教材としての価値だけではなく、当時の中国語を対象とした研究を行ったり、会話の内容から当時の社会分析を行ったり、当時の中国語の環境を明らかにしたりするなど、数多くの関連分野の研究を行うことができます。

中国語基本語彙検証データベース

日用支那語カルタ

めんこ

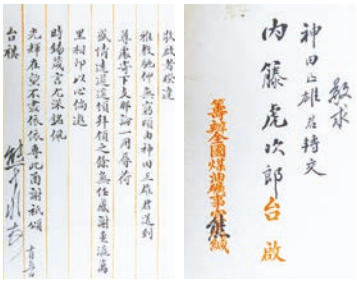
近代日中交渉史関係の一次資料の宝庫

ユニット2
研究分担者
文学部教授
陶 徳民

内藤文庫所蔵資料を生かした研究成果の発信

1986年に創立百周年を迎える関西大学が記念行事の一環として、内藤湖南（1866年－1934年）、乾吉（長男）が二代にわたり蓄積した一大コレクションを譲り受け、図書館の「内藤文庫」として収蔵しました。その内訳は蔵書33,000千冊、書簡 3,792通及び筆談記録などを含む「非冊子体史料」約20,000点です。それ以降の30余年間、多くの研究者が質量ともに誇れるこれらの史資料を生かして数々の研究成果を上げています。昨年は幸いに、学内助成プロジェクト「内藤文庫および石濱文庫所蔵資料の調査と整理に関する共同研究」（令和２年－３年　代表 玄幸子；分担者 高田時雄／堤一昭／陶徳民／長谷部剛）と、科学研究費補助金プロジェクト「大正期日本の中国研究と第一次世界大戦前後の世界―内藤文庫所蔵資料を中心に」（基盤研究Ｂ　令和２年－５年　代表 陶徳民；分担者 高田時雄／高木智見／石暁軍／玄幸子／村田雄二郎／銭鴎／小嶋茂稔／山田智／二ノ宮聡）がそれぞれ採択されました。これまでの関西大学における先行研究の実績をふまえて、文庫所蔵の代表的な史資料を発信していく予定です。例えば、1913年湖南らが主催の大正癸丑蘭亭会の関連史料、湖南の代表作『支那史学史』の自筆原稿および『支那論』（1914年３月文会堂書店初版）などがあります。後者について、湖南晩年の満蒙史料編纂事業の助手をつとめた三田村泰助が『内藤湖南』（1972年）において、「清末以来の“知己である熊希齢“が袁世凱中華民国大統領のもとで内閣総理になったから、その政策批判を行った」と、湖南の執筆動機の一端を打ち明けたことがありました。文庫中に確かに、大阪朝日新聞の北京特派員神田正雄を介して湖南による『支那論』の寄贈を受けた熊希齢の感謝状と湖南に敬贈された熊氏の写真が残っています。これらの貴重資料は近代日中交渉史の一面を如実に物語っていると言えましょう。

総理在任中（1913年９月-1914年２月）か退任直後の熊希齢の写真
関西大学図書館内藤文庫蔵



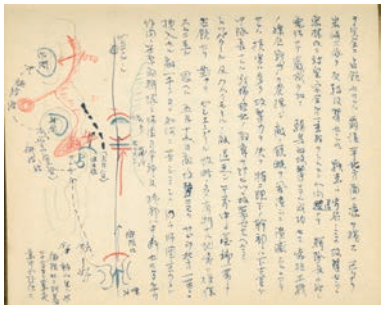
『支那論』の寄贈を受けた熊希齢の感謝状
（1914年10月；時の役職は全国煤油事宜督辦）

東アジア圏日本近代文学者の研究成果
― デジタル資料の活用から ―

ユニット2
研究分担者
文学部教授
増田 周子

作家の未公開資料やアジア･太平洋戦争と戦後問題の研究

私は、東アジア圏近代文学者の研究を行っています。特に注目しているのは、火野葦平と大阪作家全般（藤澤桓夫、織田作之助、宇野浩二ら）です。KU-ORCAS では、デジタル資料の活用を重視しているため、増田も作家の未発表資料である書簡、日記、写真、創作ノート、文壇資料などを収集し、自身でデジタル化して研究を進めています。例えば、火野葦平とドナルド・キーンの交流を、米国コロンビア大学から火野のキーン宛書簡を取り寄せ、デジタル化して考証しました。さらに、火野の未公開『従軍手帖』の翻刻、戦後のアジア諸国会議の諸相や、新中国訪問の『日記』を翻刻し、その折の写真もデジタル化し、東アジアの戦争と戦後問題の研究を行いました。近年は、火野がインパール作戦に従軍した時に出会い、日本に持ち帰るように託された第33師団（弓）の指揮官田中信男中将の『陣中日誌』を翻刻公開し、『戦ひの記』（2019年、関西大学出版部）として出版しました。陸軍中将の苦悩やインパール作戦の悲惨さが分かる貴重な史料です。現在は、藤澤桓夫のネットワークから大阪文壇研究をするため、2020年に本学に寄贈された古谷新の風流座関係資料をデジタル化し、研究を進めています。いずれも、未発表資料に基づく研究成果であり、新たな発見にわくわくしています。



『戦ひの記』昭和19年６月８日

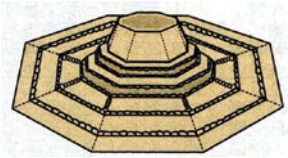
大阪文士劇「風流座」舞台写真

中尾山古墳特集

飛鳥の王墓・中尾山古墳の発掘調査
―八角墳の構造と性格に関する新事実が明らかに―

ユニット3主幹
文学部教授
西本 昌弘

中尾山古墳



中尾山古墳のイメージ図
（朝日新聞2020年11月27日朝刊）

中尾山古墳は奈良県明日香村平田に所在する終末期古墳で、国営飛鳥歴史公園（高松塚周辺地区）内の小高い丘上に立地しています。極彩色壁画で有名な高松塚古墳は一つ南側の丘陵上、直線距離にして約200メートルの位置にあります。1974年に奈良県立橿原考古学研究所が発掘調査を行い、同所員でもあった関西大学助教授の網干善教氏が文学部考古学研究室の院生・学生を率いて発掘を主導しました。この時の調査で、中尾山古墳の石槨は内法が約０.９ｍ四方の規模をもち、火葬骨壺を納入していたものとされ、墳丘は３段築成の八角形で、その外周に２重の礫敷施設をもつものと想定されました。

今回の発掘調査成果

2020年の11月から12月にかけて、明日香村教育委員会と関西大学文学部考古学研究室は共同で中尾山古墳の発掘調査を行いました。中尾山古墳は、奈良県や明日香村などが登録をめざしているユネスコの世界文化遺産「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」の構成資産であるため、その墳丘規模や構造などの解明を目的として、調査が実施されたのです。

調査の結果、墳丘は三段築成の八角形で、対辺長約20m、高さ４ｍ以上をはかること、一段目・二段目は基壇状の石積みをもつが、三段目は版築の盛土のみで整形されていることが判明しました。また、墳丘の外側には三重の外周石敷が巡ること、その対辺長は三重目で約32.５ｍをはかることが確認されました。さらに、横口式石槨は凝灰岩や花崗岩などの精巧な切石で築かれ、内法が約０.９ｍ四方の規模をもち、内部に水銀朱が塗られていました。

中尾山古墳の墳丘と外周石敷

中尾山古墳の外周石敷隅角石

中尾山古墳石槨

1974年の発掘調査以来、中尾山古墳は文武天皇（683-707年）の火葬骨壺を葬った山陵（檜隈安古岡上陵）であろうといわれていましたが、今回の発掘調査によってその可能性がさらに高まるとともに、八角墳に関する貴重な知見も数多く得ることができました。同じく八角墳である段ノ塚古墳（舒明天皇陵に治定）や野口王墓古墳（天武・持統天皇陵に治定）では、八角墳の隅角石は135度の角度をもつように丁寧な加工が施されていますが、中尾山古墳の隅角石はそれらとはやや異なり、複数の石を組み合わせて135度になるようにしたり、楕円形の石を配したりしていました。こうした事実は飛鳥における文武天皇陵の性格について見直しを迫るものといえます。

今回の発掘調査には関西大学の学生も参加し、ユニット３の米田文孝氏が彼らを率いて発掘調査を主導しました。調査成果は新聞各紙で報道されたほか、12月13日に明日香村中央公民館で行われた「飛鳥史学文学講座」において、発掘調査を担当した明日香村教育委員会の西光慎治氏が詳しく報告し、ユニット３の西本昌弘が補足説明を行いました。

関西大学所蔵貴重漢籍目録作成プロジェクト

KU-ORCAS
ポスト・ドクトラル・フェロー
二ノ宮 聡

KU-ORCASでは、2020年10月より中国・山東大学のプロジェクト「全球漢籍合璧工程調査目録編纂複製作業」の一環として、関西大学総合図書館所蔵の貴重書目録を作成しています。本プロジェクトは、世界各地の図書館や研究所に所蔵される貴重漢籍を網羅的に調査し目録を作成するものです。収集した目録の中でも特に貴重な版本は、データベースでの公開も将来的には視野に入れているとのことです。そこで、本学総合図書館にも多くの貴重漢籍が所蔵されているため、山東大学からプロジェクト協力の依頼があったものです。

本学以外にも名古屋大学、東北大学、愛知大学など日本各地の図書館が本プロジェクトに協力しておられ、山東大学から目録調査専門の研究員が派遣されています。しかし、関西大学では、本学大学院生を中心として作業を進めており、ここが他大学との大きな違いでありましょう。

本学総合図書館の貴重漢籍と一口に言っても、様々な個人文庫に所蔵されているもの、さらに閉架図書に収蔵されているものなど、種類や範囲が多く見落としが生じる可能性があります。そこで、まずは玄武洞文庫所蔵の『孝経』（およそ500冊）を網羅的に調査し、次に本学個人文庫でも貴重漢籍が多い内藤文庫を調査対象としました。この二つの文庫だけでも対象数はおよそ２万件（タイトル）程度になると思われ、2021年度末の作業完了を目指します。実は山東大学のプロジェクトは10年間に及ぶ長大な計画であり、関西大学はその一部に協力しているに過ぎません。

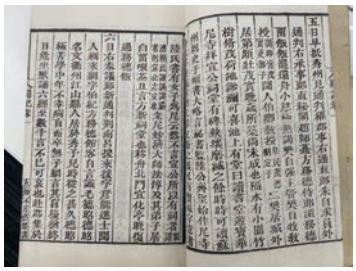
作業に従事する学生は、事前に山東大学の講習会を受けました。ですが、多くの学生は漢籍に触れたことはあるものの、版本を専門に学んだ経験はありません。そのため最初のうちは山東大学が作成したマニュアルや板本の基本書を参照しながらの目録作成となり、ペースは非常に遅いものでした。しかしながら、一月程度経つと次第に作業に慣れていき、作業ペースも徐々に上がっていきました。

書籍の板式は、マニュアルや基本書に書かれていない例外も多く、そういう書籍を扱う場合は、皆で意見を交換し、さらに板本知識が豊富な作業者に確認するなどして、入力項目のミスをできるだけ減らす工夫もおこなっています。

「全球漢籍合璧工程調査目録編纂複製作業」は、一見すると書誌収集を目的としたプロジェクトではありますが、その先には山東大学のデータベース上で貴重板本やリストの公開を見据えていて、世界規模の漢籍デジタル化プロジェクトとも言う事ができます。そのため、今後はKU-ORCASが進めている「東アジア・デジタルアーカイブ」との協力も大いに期待できると考えます。

漢籍目録作業の様子（総合図書館）

作業中の漢籍（その１）



作業中の漢籍（その２、書籍の一部）

「大坂画壇の絵画 ～日本・イギリス共同研究展～」を開催

ユニット2
研究分担者
関西大学
名誉教授
中谷 伸生

博物館での展示風景

江戸時代後期の大坂では文人画（南画）が盛んになり、その流れは京都を圧倒する勢いでしたが、多くの美術史家たちは、東京と京都の画家たちにしか目を向けず、大坂の文人画家たちを切り捨ててきました。しかしながらこれからは、こうした大坂の豊かな文人趣味を再評価すべきと考えています。

中井藍江他《藍江菘翁他筆書画めくり》

山口素絢《唐崎の松》江戸時代後期

長山孔寅《七種草花図》江戸時代後期

なお、今回の企画は、関西大学アジア・オープン・リサーチセンター(KU-ORCAS)、ロンドン大学SOAS、京都国立近代美術館、大英博物館日本部門に所属する研究者が協力して2018年以来積み上げてきた研究を展覧会として開催するもので、2022年春には京都国立近代美術館で第２弾を、その後にもロンドンの大英博物館日本美術展示場で第３弾の展覧会を予定（未定）しています。

2020年12月14日（月）から2021年１月23日（土）の間、本学博物館との共催により、本学図書館及び東西学術研究所が所蔵する近世近代の大坂画壇と京都画壇の作品群の中から、大坂の画家たちの文化交流に焦点をあて、また、大坂の画家たちと交流した京都の画家たちの作品も一部加えて展示会を開催しました。

福原五岳《巌上揮毫・画龍点睛図》（双幅）江戸時代後期

濱田杏堂《桃源之図》江戸時代後期

浦上春琴《書屋山水図》文政３年（1820）

また、京都の円山応挙と呉春らの活躍で、多くの写生派の画家たちが生まれましたが、それらの中に大坂の写生派の画家たちがいました。

そして、文人画と写生派を軸とした大坂画壇の絵画は、一方で流派に捉われない種々様々な画家たちも輩出しており、蒹葭堂の周辺で活動した戯画作者の耳鳥齋はその代表です。

耳鳥齋《顔見世之図》江戸時代後期

中井藍江ほか《藍江菘翁他筆書画めくり》江戸時代後期

江中無牛《売飴爺図》大正・昭和時代

DRAW YOUR ASIA

関西大学
アジア・オープン・
リサーチセンター

誌面が動く!! AR動画

DRAW YOUR ASIA
関西大学
アジア・オープン・
リサーチセンター

❶下のQRコードを読み取り、無料アプリ「COCOAR2」をダウンロードしてください。
❷アプリを起動し、上のロゴをかざしてください。AR動画が再生されます。

COCOAR2 ダウンロードはこちらから

iPhone/iPad　Android

※ご使用の機器や環境により、一部の機能が動作しない場合や画面が正常に表示されないことがございますのでご了承願います
※なお、AR動画は次号発行の際に新しい動画に更新するため、古い動画は視聴できなくなります

NO4 KU-ORCAS NEWS LETTER

発行日　2021年3月25日
発　行　関西大学アジア・オープン・リサーチセンター
〒564-8680　大阪府吹田市山手町3丁目3番35号
TEL:06-6368-1834　E-Mail:ku-orcas@ml.kandai.jp
HP　http://www.kansai-u.ac.jp/ku-orcas/
Facebook　https://www.facebook.com/kuorcas/
twitter　https://twitter.com/KU_orcas